

## 中野市立高社小学校における防災・安全教育の充実に向けた取組について

### — 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 —

#### 中野市立高社小学校

#### 1 はじめに

中野市立高社小学校は、令和2年4月に長丘小学校、平岡小学校、科野小学校、倭小学校の四つの小学校が統合されてできた学校である。校区は、中野市北部の高社山の麓に位置し、周囲はなだらかな傾斜地で水はけがよく、果樹栽培が盛んな地域である。また、統合のために校区が非常に広く、全校の約3割がスクールバスで通学をしている。校舎は旧平岡小学校を使い、統合により人数が1.6倍になった児童のために学校敷地を整備し直し、校舎を増改築している。校章は、統合した4校を四葉のクローバーとして表現し、中野市のシンボルでもある高社山が簡略化して描かれている。また、「広く 高く 豊かに ～ふるさとの山 高社山のように～」を学校目標として、地域に根ざした教育を進めている。開校当初は四つの小学校それぞれの特色を取り入れた教育課程を編成して教育活動を行ってきたが、開校して6年目を迎え、高社小学校独自の教育活動が着実に定着し、深まりを見せている。

令和7年度の学級編成は、各学年2学級とひまわり（知障）学級、わかくさ（自情障）学級、あおぞら（自情障）学級の全校15（3）学級で、児童数は363（22）名である。

#### 2 中野市立高社小学校の防災・安全教育について（概要）

	活動種別	活動名	主なねらい・内容
4月	避難訓練	第1回避難訓練（火災）	避難経路の確認 職員の誘導手順確認
5月	交通安全	交通安全教室	トラックを使用した死角・内輪差体験 衝突実験による学習
	防犯・安全	集団下校訓練	地区別人員点呼の確認 緊急時の集団下校方法の確認
6月	職員研修	不審者対応講習	警察署協力のもと、不審者との対峙方法の学習、防犯技術の向上
	職員研修	救命講習（AED）	水泳授業等を想定した心肺蘇生法と職員連携の確認
	避難訓練	引渡し訓練	高社中学校と合同実施

			保護者への確実な引渡し手順の確認
	防犯訓練	不審者対応訓練	侵入時の避難、校外遭遇時の対応、職員による児童保護
	交通安全	自転車教室（3・4年）	実技を通じた交通法規の確認と安全な道路利用
9月	避難訓練	第2回避難訓練（地震） ★	休み時間に地震発生を想定（予告なし） 自主的な身の守り方
11月	避難訓練	第3回避難訓練（火災） ★	冬期で校庭避難できない状況を想定 防火扉体験

### 3 学校防災アドバイザーの関わり

#### (1) 児童への指導・避難行動について

##### ア 緊急地震速報への即時反応：

警報が聞こえたら、直ちに机の下に入るよう指導を徹底する。理由は、県内では警報から揺れが来るまでの猶予時間はほとんどないため。



##### イ 移動中の回避行動：

廊下等にいる際、放送が入ったらその場に止まり、放送を聞くよう指導する。理由は、揺れている最中の移動は危険なため。

##### ウ 「安全な場所」の周知：

休み時間等にどこへ避難するか（安全な場所）を事前に決め、イラスト掲示などで児童に伝えておく。

##### エ 目的の明確化：

「机の下に入る」「帽子を被る」こと自体が目的化しないよう注意。あくまで「安全に避難する」ことが目的であることを指導する。

#### (2) 教職員の動き・巡視（残留確認）について

##### ア 目視による確認の徹底：

トイレの個室などは、声をかけるだけでなく、必ず「目で見て」確認。理由として、災害時は呼びかけに応答できない状況も考えられるため。

##### イ 手順の統一：

先生によって確認手順にばらつき（個室の中まで見るか、声かけのみか等）があったため、手順（どこを、どう、何を見るか）を統一する。

##### ウ 搜索の優先度と連携：

不明者を出さないことが最優先であるため、多少時間がかかっても死角を丁寧に巡視。確認済みの場所は扉を閉め、印をつけるなどの工夫をすると、後の消防士による救助活動の助けになる。

(3) 今後の訓練計画・環境整備について

ア 訓練バリエーションの拡大：

「地震・火災」「不明者・怪我人の有無」「屋外避難・室内待機」など内容を増やし、3年間程度ですべての訓練をローテーションで行えるようにすると良い。冬期（積雪時）の訓練も計画し、実際の環境での備えを行うことを推奨。

イ 振り返りの標準化：

各学級での振り返りについて質問項目を予め決めておき、どのクラスでも同じように実施できるようにする。



4 事業の成果及び今後の課題

廣内先生の指導により、開校6年目を迎えた本校の防災体制について、良さを再確認するとともに新たな課題が明確化された。昨年度にいただいた支援により、避難訓練のバリエーションが増え、実際に起こりうると思われる状況の訓練が増えた。一方で、マニュアル上の形式的な訓練にとどまらず、「登下校中」「休日」など多様な場面を想定した訓練の必要性や、職員の臨機応変な動きの重要性を感じた。今後は、いただいた助言を基に防災計画をよりよいものに修正し、保護者・地域・高社中学校との連携をさらに深め、実効性の高い防災・安全教育を推進していきたい。

(文責 教頭 荻原 啓一)

中野市立高社中学校における学校安全総合支援事業の取組について

—ミッションカードを活用した生徒の主体的な安全行動の育成—

中野市立高社中学校

1 はじめに

本校は、中野市北部の高社山のふもとに位置する、全校生徒 208 名の中学校である。西には千曲川、東には夜間瀬川といった大きな河川があり、千曲川は浸水想定区域外である一方、夜間瀬川は浸水想定区域に指定されている。

本校では、生徒の生命安全を最優先に考え、防災・防犯に関する実践的な指導體制の確立を目指してきた。近年、全国的に大規模地震が頻発していることや、登下校や学校生活の中で突発的に起こり得る危険事象への対応が求められていることを踏まえ、従来の避難訓練の改善、教職員の防災対応能力の向上、生徒の主体的な安全行動の育成を目的として、令和6年度より「学校安全総合支援事業」に取り組んでいる。

2 中野市立高社中学校の防災体制について

(1) 防災管理体制における課題

事業に取り組む以前の本校では、避難訓練は年間複数回実施していたものの、「訓練が形骸化し、生徒一人ひとりの行動改善につながりにくい」という課題が指摘されていた。次の点が課題として挙げられる。

ア 訓練は放送を合図に整然と避難する形式が中心であり、実際の地震発生時に教室以外の場所にいる可能性への対応が不十分であった。

イ 生徒の行動は「指示を待つこと」に偏り、自ら危険を判断し行動する力の育成が弱かった。

ウ 余震時の行動や、ガラス片の散乱、家具の転倒などを想定した行動が十分に盛り込まれておらず、実災害に即した訓練とは言い難かった。

(2) 防災教育における課題

防災学習は授業内で行われていたものの、「防災知識が行動につながる教育」という観点では課題があった。

ア 自助・共助の重要性を理解している生徒は多いが、実際にクラスメイトを助ける行動に結びつかない場面が見られた。

イ 防災に関する指導内容が担当教員の経験や認識に依存し、学年・学級間でばらつきが生じていた。

ウ 特別支援学級の生徒を含めた全校体制での配慮や役割分担が明確ではなかった。

これらの課題を解消するため、学校防災アドバイザーの支援を受けながら、学校全体の防災体制を再構築する必要があった。

### 3 学校防災アドバイザーの関わり

昨年度より、小中連携の視点から学校防災アドバイザーとして、中学校は内山琴絵先生、小学校は廣内大助先生に主に御指導いただいている。

#### (1) アドバイザーからの主な助言

##### ア 小中合同引渡し訓練において

(ア) 災害時に帰宅困難となる場合を想定し、保護者に「どのような対応を望むか」を事前に確認しておくこと。

(イ) 小学校との兄弟関係を把握しておくこと。

##### イ 休み時間中の発災を想定した訓練の導入について

災害は授業中とは限らず、非定常時の安全確保行動が不可欠である。

##### ウ 多様な訓練を計画的に実施する体制について

3年間のサイクルでローテーションを組み、一通り訓練ができるよう整えること。

#### (2) アドバイスを踏まえた学校の改善点

##### ア 小中合同引渡し訓練（令和7年6月13日実施）

すべての家庭ではなかったものの、事前に小学校との兄弟関係や、帰宅困難時の対応について Google フォームを活用して確認することができた。「万一、震災などにおいて、何らかの理由でお子さんが帰宅困難になってしまった場合、近隣の避難所で宿泊させてもよろしいでしょうか」との問いに「はい」99%、「いいえ」1%であった。「いいえ」と回答した家庭からは、「避難所まで迎えに行くので、迎えに行くまでは学校で待たせてほしい」「見守ってほしい」といった意向が示された。

実施後、内山先生より、日中にメッセージを受信した後、保護者がどの程度の時間で学校に到着できるかを把握しておくこと、より実践的なタイムラインを作成しやすいとの助言をいただいた。具体的には、①30分以内、②30分以上1時間以内、③1時間以上の3区分程度で確認しておくことよとのことであった。

##### イ 教室内待機訓練（ミッションカードの活用）（令和7年9月1日実施）

###### (ア) 実災害に即した訓練への転換

「休み時間中の大地震」という具体的なシナリオを設定し、生徒は各自の場所で初動対応（しゃがむ・頭部を守る・動かない）を行った。

###### (イ) ミッションカードによる生徒主体の行動育成

事前説明に加え、訓練後に行動の振り返りを行うことで、仲間の安否確認や誘導が自然に行われるようになった。

###### (ウ) 行動基準の明確化

揺れた際は「机の下」「落下物のない場所」へ避難すること、余震は原則2回を想定して行動すること、揺れがおさまった後の教室集合手順（①点呼、②安否確認、③伝達・報告）を統一した。

(エ) 教職員研修の実施

初動対応や安全確保に関する指導言語の確認、無線を活用した情報伝達訓練を行い、「伝達職員一覧」を基に役割配置を固定化した。

(オ) 継続的な振り返りによる改善

生徒・教員の振り返りシートを集約し、動線表示の改善、説明の統一、事前学習資料の作成などにつなげた。

ウ 高社中学校3年間サイクルのローテーション

昨年度ローテーションを作成して本年度2年目の取組となっている。

高社中学校 避難訓練 ローテーション

	4月	6月	9月
1年目	通常訓練 地震+火災 グラウンド 水害・二次避難	引渡し訓練 小中合同 教室 放課後	避難訓練 地震 教室 トリアージ
2年目	通常訓練 地震+火災 グラウンド 水害・二次避難	引渡し訓練 小中合同 教室 放課後	避難訓練 地震 教室 怪我・行方不明あり
3年目	通常訓練 地震+火災 グラウンド 水害・二次避難	引渡し訓練 小中合同 教室 放課後	避難訓練 地震 教室 防火扉閉め避難

4 教室内待機訓練

(1) 訓練の目的

本訓練は、休み時間中に大規模地震が発生した状況を想定し、生徒・職員が安全確保と安否確認の行動内容や基準等を確認することで、防災態勢の強化を図ることを目的とした。信州大学の内山先生の助言を踏まえ、余震や火災等の危険を想定した行動原則を再確認し、非常時に自ら考えて行動する力の育成を目指した。

(2) 訓練の実施概要

ア 期日：令和7年9月1日（月）

イ 時間：10:35～11:12（訓練）、11:15～11:35（反省会）

ウ 想定：休み時間中の大地震、耐震校舎、停電発生、余震2回

エ 内容：生徒は各自の場所から教室へ避難。事前に負傷・支援等のミッションカードを各クラス5名に配布

オ 避難場所：各教室

(3) 特別支援学級・保健室等の対応

特別支援学級の生徒は全員5組の教室に避難し、担任が一括して確認を行った。保健室・相談室にいた生徒については、見回り担当職員が確認し、本部を經由して担任へ報告した。

(4) 安否確認の手順

担任が安否確認を実施し、保健室等の生徒を含めて人数を確定後、学年担当がトランシーバーで本部へ報告し、本部が総括して校長へ報告した。

(5) 当日の訓練の様子

生徒は迅速に安全確保行動を行い、余震を想定した緊急地震速報にも落ち着いて対応していた。ミッションカードによる想定行動も適切で、支援行動が多く見られた。見回り担当による確認の結果、逃げ遅れはゼロであった。



倒れている生徒に寄り添う



支えて避難する生徒



体育館中央で

#### (6) 考察

休み時間という不規則な状況下においても、基本行動が定着していることが確認できた。ミッション型訓練により、混乱場面での対応力も育成されている。一方で、指導内容のさらなる統一、通信手段の確実性、避難後の行動計画の共有といった改善点も明らかとなった。

### 5 事業の成果及び今後の課題

#### (1) 成果

##### ア 生徒の主体的行動の向上

ミッションカード方式により、声かけや誘導、仲間の確認など主体的な行動が向上した。放送が使えない状況でも、行動基準を基に判断できる生徒が増えた。

##### イ 教職員の防災対応力の向上

指導言語の統一により、初動対応のばらつきが改善され、職員間の連携も安定した。

##### ウ 安全文化の醸成

生徒が「自分の命を守る行動」を自ら考える雰囲気形成され、教職員の危機管理意識も高まった。

#### (2) 今後の課題

##### ア 教室集合後の行動計画の精緻化

##### イ 職員連携・通信体制の安定化

##### ウ 地震以外の災害訓練を含めた体系的な危機管理教育の整備

### 6 まとめ

本事業を通して、本校は「教職員が守る防災」から「生徒と共につくる防災」へと大きな転換を図ることができた。今後も、アドバイザーからの助言を生かし、実効性ある訓練を継続することで、生徒一人一人が自らの命を守る力を確実に育成していきたい。

(文責 教頭 宮崎 隆)

## 防災学習から考える社会と地域、自分のあり方について

—防災への興味関心を高める、自分と大切な人を守るために—

白馬村立白馬中学校

### 1 はじめに

長野県白馬村に位置する本校は、雄大な白馬三山を西に仰ぐ村内唯一の中学校である。現在、10 学級 218 名の生徒が学んでいる。当地域は県内有数の豪雪地帯であり、フォッサマグナや河川の浸水想定区域を有するなど、地理的特性から常に自然災害のリスクを内包している。

本校の学校安全・防災教育は、過去の教訓に深く根差している。特に、死者ゼロの「白馬の奇跡」として語り継がれる2014年の神城断層地震、そして2023年の土砂災害は、地域社会全体で災害に備えることの重要性を改めて私たちに示した。

こうした背景のもと、本校では昨年度より、生徒が「いつ・いかにして行動すべきか」を「自分ごと」として主体的に考え行動するための防災学習に焦点を当てている。さらに本年度は、国際的なリゾート地という側面から、海外からの観光客や移住者にとって有効な防災活動、および避難所運営のあり方についても焦点を当てて実践を行った。



### 2 本校の防災体制

#### (1) 白馬中学校と災害、防災学習

本校生徒の中で、11年前に発生した神城断層地震の記憶を持つ者は少なく、当時を経験した学校職員もごくわずかである。この大災害は「神城断層地震」という言葉や報道された内容を見聞きしただけに終わっている生徒が多い。そのため、その経験を風化させず、具体的な防災教育にいかに繋げていくかという取組を、昨年度より継続的に行っている。

#### (2) 防災安全教育の計画

本校では、月1回の点検項目に従った安全点検を実施している。また、年3回の想定別避難訓練を実施し、危機対応能力の向上を図っている。

- ・第1回避難訓練（4月）：火災を想定した教室からの避難、避難誘導、人員確認、および学校防災自営団の業務確認を実施した。

- ・第2回避難訓練（11月）：時間の告知なしの避難訓練。給食後の休み時間の個人判断による避難、避難誘導、人員確認を実施した。
- ・第3回避難訓練（12月）：冬季における避難経路の確認、特に積雪や凍結による通行不能場所の確認を目的として実施した。

### (3) 避難所としての役割

本校は、地震、洪水、土砂災害、内水氾濫、火災発生時の指定緊急避難場所であり、想定収容人数は450名である。しかし、食料備蓄は生徒・教職員の2食分のみで、寝具、簡易トイレ、非常用水などの必需品は備蓄がない。約200m先の指定避難場所「協和ウイング白馬」に寝具などの備蓄がある状況だ。

昨年度より、過去の災害経験に基づいた具体的な訓練や体験を積み重ねてきた。特に、学校が避難場所となった場合の研修や、生徒が避難者となった場合の学習を徐々に実施している。

## 3 防災学習の積み重ね～自分ごととして～

昨年度に引続き、信州大学の廣内大助教授からの助言を得て、同大学の学生の協力のもと、本校2学年を中心に総合的な学習の時間などを用いて防災学習に取り組んだ。

年間の最大のねらいは「生徒たちが自分ごととして、防災に興味関心をもつ」ことだった。生徒たちには、①災害・防災について「知る」、②自分たちにできることを「考える」、③実際に「行動して」防災の意識を高める・広める、④災害時に大切な人を守るために「どのようなことを知るべきか考える」というテーマを与え、以下の学習活動を行った。

### (1) 「HUG（避難所運営ゲーム）」

HUGというカードゲームを用いて、実際に避難所を運営する立場を疑似体験し、災害発生時の困難さを実感した。

### (2) ゲストティーチャーを招いての「対話会」

地域の方や実際に防災の活動をしている方と対話をし、知識を得て、より関心を高める機会とした。

ゲストティーチャー：日本赤十字社長野県支部 水出秀子様、白馬村交番 名和孝志様、白馬村社会福祉協議会 中西彩香様、北部消防署 北村典司様、HIBA代表 イアン様



この対話会から生徒たちは「自助、地域や外国人との助け合いの重要性」を実感した。また、避難所のルールや応急処置、具体的な備えについてなどにも課題意識を持った。

### (3) ブース体験・避難所宿泊体験学習

様々なテーマのブース体験と避難所宿泊体験に真剣に取り組むことで、災害や防災に関してより深く「知り、考える」ことを目標とした。

ブース体験では、信州大学の学生に「AR浸水体験」「新聞紙活用体験」「令和元年台風19号の被害について」を担当していただいた。暗闇体験は、日本赤十字社長野県支部の方に担当していただいた。救急体験は北部消防署の方に担当していただいた。また、避難所宿泊体験では、白馬村役場総務課、白馬村社会福祉協議会、白馬高等学校の学生に協力していただいた。



この体験学習を通して、生徒たちは災害時の協力や実技（心臓マッサージ、新聞活用、浸水・暗闇体験）の重要性と難しさを実感した。

(4) それぞれの疑問や課題を解決するフィールドワーク

これまでの学習や体験から、生徒たちは様々な疑問や課題を持つようになった。そこで、災害・防災に関して、自ら問いを立て解決していく活動を通して、災害や防災についての意識をさらに高めるという目的でフィールドワークを設定した。

フィールドワークで協力いただいた地域の方々：ザ・ビッグ白馬店、ハピアAコープ白馬店、北部消防署、白馬村図書館、白馬村村長、村役場総務課、村役場健康福祉課、白馬村アーカイブサポーター、信州大学学生



生徒たちは「どのようなことを知っていれば大切な人を守ることができるか？」というテーマの下、「何を学ぶ」「どんなことを発信する」「どんなことをみんなに知ってほしい」という視点を持って活動に臨んだ。このフィールドワークは、生徒の主体的な学びや対応力が見られる有意義な活動であった。

(5) 「白馬ジュニアフォーラム 2025」での情報発信

信州大学廣内大助教授、信州大学学生 2 名、白馬高等学校教諭、白馬村教育長、保護者、地域の方、メディア（大系タイムズ・SBC）をお招きし、白馬中学校生徒たちの学習の成果を発表する「白馬ジュニアフォーラム 2025」を協和ウイング白馬にて開催した。2 学年生徒たちは今年度学んできた防災学習について、フィールドワークを通しての経験に焦点を当てて発表を行った。発表のグループ・タイトルは以下の通り。



①白馬村長へインタビュー 皆さんの安心安全のために、白馬村長にインタビューしました。	⑥白馬ならではの災害 「断層」について調べました。断層を見て感じたことを皆さんにお伝えします。
②健康福祉課・防災ランプ 村のみなさんと協力することの大切さを知ってほしいです！	⑦睡眠の質向上委員会 避難所での「睡眠の質」気になりませんか？
③観光客の意識は？ 観光客やホテル白馬、白馬村役場にインタビューをしました！	⑧道路が使えなくなったら・・・ 私達の発表で、防災に関心をもってもらえたら嬉しいです。
④3000 円台で買った防災バッグ 皆様は 3000 円台で防災バッグを買えると思いますか？	⑨くらしーず！ in 消防署 あなたの心にマッスルパワー！災害について見直しましょう！
⑤ペット防災 「防災」という言葉を聞いたときに、ペットのことを考えたことがありますか？	⑩鍋調理と袋調理の違いは？ 鍋調理と袋調理の違いを調べました。どちらが災害時に適しているでしょう？
⑪株式会社B o s a b a 我が社が開発したカードゲームを紹介します！ぜひご覧ください！	

#### 4 学校防災アドバイザーの関わり

【信州大学廣内大助教授からの御指導】 白馬ジュニアフォーラム 2025 より

報告された「防災と平和」および「暮らしを守り良くする」取組は、「命の大切さを知り、守ること」を根幹としている。生徒一人一人が身近な課題を「自分ごと」として捉え、熱意をもって取り組んだ点は特に評価できる。

この総合学習の経験は、「自ら課題を設定し、仕組みに気づき、伝える」という重要なプロセスを通して、深く考える習慣と、物事を創造する力を確実に培っている。この能力は、将来直面するであろう多くの困難を解決し、白馬村の未来を創造・発展させていくための強力な礎となるだろう。

#### 5 事業の成果及び今後の課題

信州大学の廣内教授、内山助教、信州大学の学生達と、本年度の防災学習を振り返る中で、以下のような成果と課題が挙げられた。

生徒は強い探究心を持ち、多面的・多角的な学習を展開した。特にブース体験とフィールドワークを通じて、試行錯誤を重ねるブラッシュアップの時間を十分に確保し、「学び方そのもの」を習得できたと感じる。最終発表内容は大学生の研究レベルに達しており、観光地白馬ならではの課題を含め、多岐にわたる問題にオリジナルな視点で取り組み、解決しようとする姿勢が高く評価できる。

一方で、協力者とのマッチングや時間の制限など、総合的な学習の時間の難しさも感じられた。今後は、身近なテーマに焦点を当てる必要があり、今回の発表会だけでなく、パンフレット等の媒体を用いて学習成果を村内外に広く発信することで、さらなる学びの波及が期待できる。こうした生徒の関心を引き出す継続的な取組の実施が学校に望まれる。

#### 6 まとめ

生徒たちは4月から半年以上かけて課題に向き合い、その成果を白馬ジュニアフォーラム 2025 で堂々と発表した。誰かに任せるのではなく、課題に対して関心を持ち続ける姿勢は、まさに「自分ごととして考える」防災学習の実現につながっている。

3年生は最高学年としての責任感と自信をもち、聴衆の心を動かす発表をした。2年生は一面的な見方にとらわれず、中学生の枠を超えた専門家のような鋭い視点を示した。彼らの学びや考えは学校内にとどめておくにはもったいないものであり、自信をもって外へ広げ、村全体へと視野を広げ、地域づくりにつなげることが期待される。

(文責 教頭 矢澤 憲)

## 穂高東中学校における、学校安全総合支援事業の取組について

### — 地域と連携した防災学習について —

安曇野市立穂高東中学校

#### 1 はじめに

本校西側には北アルプスが連なっている。学区東側には犀川、穂高川を始めとする多数の河川が流れており、学区内にも北アルプスを源流とする複数の河川や堰があり、安曇野市防災マップによると本校は0.5m未満の浸水が想定されている。また、本校学区の東側には活断層の存在が指摘されており、「震度想定マップ」では、震度6弱が想定されている。加えて国の地震調査研究推進本部の調査によれば、安曇野市内を通る「糸魚川－静岡構造線断層帯」で起こるM 7.6程度の地震発生率は、30年以内に14%～30%とされている。

このような安曇野の自然環境に囲まれて、全17学級（うち特別支援学級3学級）、全校生徒433名、職員43名が学校安全総合支援事業による地域と連携した防災学習を取り入れた学校教育活動を行っている。

#### 2 「地域と連携した防災学習」の実施に向けて

本活動は平成29年度より実施されてきた。新型コロナウイルス感染症による中断を経て、令和4年度より再開されている。学校グランドデザインの中の教育課題として、「やらされるから“取り組む”へ」がある。あらかじめ決まった活動を行う避難訓練から、主体的に考え関わり取り組める避難訓練へと変化させていくことが大切であると考えている。

令和4年度までは、各地区の実情に合わせて各地区の区長の方が当日の計画を立案していたが、令和6年度より事前打ち合わせの際に各地区生徒会長より「やってみたい活動、必要になりそうな活動」を提案する形式に変更している（地区生徒会長への事前指導にて作成）。また令和7年度は、地区生徒会長だけでなく本校生徒一人一人の防災への意識や関心を高める目的で、地区生徒会の時間を使って、「各地区で起こりそうな災害や危険箇所など」について生

令和7年度 安曇野市立穂高東中学校グランドデザイン

安曇野市が目指す子ども像  
からだを動かかし、頭で考え、心に感ずる “未来を拓くたくましい安曇野の子ども”

学校教育目標 **自ら学ぶ 共に学ぶ 人から学ぶ**

＜ 学校づくりの理念 ＞  
穂高東中学校は、全職員で、生徒・保護者・地域の皆さんと力を合わせ、互いの考えを尊重し友と交流するプロセスを重視する授業や活動を通して、自己肯定感（自分に良いところがある）、自己有用感（自分は役に立っている）、自己効力感（自分もできる）を高め、学び合い、認め合い、高め合う自律した学習者を育てる学校とするべく取組を進めます。

目指す学校像：自他の良さを認め、協働しながら自分を生かす力を育む学校  
目指す教師像：自らも学び、生徒を受容し、良さを認め、可能性を拓く教師  
目指す生徒像：自他の良さを認め、人を思いやり、互いに学び合える生徒  
筋道を立てて考え、考えたことを表現し行動に移せる生徒  
視野を広げ、自立心をもってよりよく生きようとする生徒

教育課題：やらされるから“取り組む”へ

<b>重点1 学びづくり</b> 授業における明確なねらいと振り返りを重視し、考えを書いて説明したり質問したりする場面を設けて、協働的な学びに向かう授業改善を図る。	<b>重点2 集団づくり</b> 生徒の良さを認め、人権学習や生徒会活動等を核として、リーダーとフォロワーを意識した認め合い支え合う人間関係づくりを図る。	<b>重点3 地域との関わりづくり</b> 地域の環境や人材を生かし、地域に学ぶ活動を通して、穂高の良さを理解し誇りに思ったり、働きかけたりしようとする心の醸成を図る。
---	--	---

令和7年度 穂高東中学校グランドデザイン  
(一部抜粋)

徒一人一人が考え、それをもとに各地区生徒会長生徒が訓練内容を提案する形で行った。このように各地区の区長の方と各地区生徒会長生徒との協議を経て、当日の活動計画を作成することを通して、より生徒が主体的に取り組める活動に近づいていると考える。

### 3 令和7年度版 地域と連携した防災学習の実際

矢原	浸水等の被害想定と対応を確認 防災倉庫の紹介	西原・田 中・上原	テントの設営、非常食の試食 防災クイズ
白金	消防署による心肺蘇生講習 (AEDの使い方勉強会)	柏原区	防災体制の説明 防災倉庫の見学 消火器・バケツリレー訓練 非常食の試食 AR浸水体験
等々力区	消火器の使用方法 段ボールベッドの作り方 非常食の試食	柏矢町	防災リーダーによる防災講話 消火器訓練 防災倉庫の見学
等々力町 区	地域の方への防災インタビュー インタビューを受けての ポスターセッション	久保田	防災講話、防災クイズ 防災食作り・試食 水害マイタイムラインの作成
穂高町区	防災マップで地域の災害学習 非常用担架の作成 段ボールベッドの作成	狐島	ハザードマップチェック 防災倉庫確認・照明装置について 保存非常食の試食
本郷上下	初期消火訓練 防災マップについて説明		

当日の様子



心肺蘇生講習



事前打ち合わせ会の様子

- 区長さんと意見交換 -



AR浸水体験



非常用担架作成

### 【実施後の生徒の感想】

- 僕たち中学生が率先して行動することで、一人でも多くの人を助けることに貢献できることに今日の活動を通して気づくことができました。自分の安全だけでなく、周りの人や地域の人の安全を確認していきたいと思いました。
- 日本は地震大国なので、今はまだこの地域に大きな地震はあまり発生していないけれど、絶対に起きないということはないので、いつでも対応できるように知識を深めておきたいと感じました。
- 担架や、段ボールベッドの作り方がわかったから、それを他の人に教えたり、学校で学んだ応急処置のやり方も加えて、誰かの役に立てるようにしたい。1人だけで何でもできるわけではないから、周りの人と協力したい。
- 私たちのために防災学習の活動を考え、こうやって協力してくれていることは本当にありがたいことだなあと感じます。地域の一員として、自分の命を守ることを第一優先にしながらも、自分にできることは何かを考え行動したいです。
- 避難指示が出た際には、なるべく早く避難することや、自分や家族の状況を把握して、いつ避難するべきかを考えていきたい。また、地域の一員としての自覚をもち、行動できるようにしたい。
- 自助、公助、共助を意識し、近隣住民の方々と協力して災害を乗り越えられる人でありたい。近隣の方々と顔見知りになる必要があると感じた。

### 【学校防災支援アドバイザー 信州大学教育学部 本間喜子先生からの御指導】

- 学校の避難訓練に、自治体を始めとした様々な機関が関わっているのは珍しい。令和4年度の時と比べて、それぞれの地域での活動内容がグレードアップ・情報更新がなされている。実際に災害が起こったとき、中学生には何ができるのか具体的に知るよい機会になっている。
- 地震を想定した避難訓練の中で、机の下に隠れる生徒の姿があった。実際に地震が起こった際には机も揺れるので、机の脚を押さえる必要がある。地震が起きたときの様子を見せるなど、より本番を想定した訓練にできるとよい。
- 大人も、訓練として取り組む意識を高めていきたい。イレギュラーな訓練（放送が使えない、休み時間に行うなど）を取り入れるなどして、形式的なやられる訓練ではなく自分の身を守るための訓練にするための工夫があるとさらによい。
- 各地区で、地域に合わせた様々な活動が行われている。生徒たちが地域と連携した防災学習を終えた後に、お互いの体験を伝え合える機会が作れると、より災害・防災への意識を高めていくことができる。

#### 4 今後の課題 ～担当や職員が代わっても目的が失われないために～

令和4年度より再開された地域と連携した防災学習だが、再開以降、毎年企画者が代わっている上、立ち上げ当初の様子を知る職員や区長の方も少なくなっている。立ち上げ時の目的や手順について、情報の共有と確認の重要性を改めて認識した。本活動の担当職員が「地域と連携した防災学習」の目的や手順を理解するとともに、まずは職員や地域の大人が、活動の趣旨を理解・共有することが大切であると感じている。また本活動には、区長の方を始めとした学校外の多くの方が関わっている。学校外の様々な方の視点は、この活動を「やられる活動」にしないために重要であると考えます。以下は、市危機管理課、地域コーディネーター、市教育委員会との振り返りで出された成果と課題である。

- いざというときに頼れる地域の大人の顔を知るという意味で、地域で働く大人へのインタビューは意味があったと言える。しかし、災害時「自分たち中学生に何ができるのか？」を考えてはいなかったため、そこを今後考えていけると更によい。
- 防災学習に参加している教師側の立ち位置が不明瞭だと感じた。生徒と一緒に学習に参加するのか、地域と一緒に防災学習を伝えていく側なのか、はっきりさせた方がよいのではないか。
- 地域の方も、子ども達に向けて教えるために自分たちも地域の防災について学習している。学校（生徒）と地域の方の双方にとってメリットのある活動だと言える。
- 防災訓練に参加する生徒の様子を見ていると、レクリエーションのような雰囲気を取り組んでいる姿も見られた。訓練である以上、本番を想定した心構えなどを事前に指導した方がよいと感じた。
- 集合時間に遅れてくる生徒がいた。災害は待ってくれない。平日頃からどれだけ備えてあるかで、被災後の生活が大きく違う。
- ふだん何気なく通っている道も、災害時は危険箇所になる可能性が十分にある。日頃から防災への意識付けが重要である。

#### 5 まとめ

今年度は、4月に大北地域を震源とした大きな地震が発生し、安曇野市でも震度4を観測した。学校では損壊箇所が見られなかったが、物が落ちたり、大きな揺れに恐怖を感じたりした生徒も多かった。その後に行われた活動ということもあつてか、地震による被害を想定した生徒もおり、多くの生徒が防災学習を自分ごととして捉えることができていた。来年度以降、身近に災害が起きない年も、いかに自分ごととして捉えられるかが今後の学習の課題になっている。

(文責 教諭 嶋崎 大志)

## 学校安全総合支援事業の取組について

### — 原則を決めて、臨機応変に対応する避難訓練実施について —

#### 安曇野市立三郷中学校

#### 1 はじめに

三郷中学校は安曇野市南部に位置し、安曇野市は糸魚川 - 静岡構造線で大きく2つの地質に分けられており、その南部に三郷中学校が位置する。周囲には、小学校や市役所支所、文化体育館などがあるが、学校前の道路は広くなく自動車のすれ違いはスムーズにいかない。そのため、緊急時における避難関係車両が入る場合、災害の状況によっては到着が遅くなる場合が考えられる。

また、生徒数は484名で特別支援学級が6クラスと多く、災害発生時においては予想できない生徒の動きがあることも考えられ、臨機応変に対応することが必要な状況である。

#### 2 安曇野市立三郷中学校の防災体制について（概要）

本校校舎は昭和52年に建設され、建設から48年が経過している。校舎については、必要に応じて建て増しがされており避難する際にも複雑な構造になっている。そのため、安全に避難できるように「おはしも」を徹底し、「落ち着いて避難する」「落ち着いて避難誘導する」ことを大切に、これまで訓練を重ねてきている。しかし、想定外を構想した避難訓練においてはなかなか対応することが難しく、昨年度は避難できなかった生徒がいる想定で訓練を実施したところ、避難人数が曖昧のまま避難完了としてしまった。

令和7年においては、近隣の三郷小学校と協力して「引渡し訓練」を行った。想定は、「台風による水害発生の危険性がある」とした。一昨年度の引渡し訓練を行ったときの反省をもとに、「生徒の状況がわかるようにするために、一か所に全校生徒を集める」「通路を一方通行とする」「引渡しについては、事前に学校へ報告した方のみにする」ということを確認し行った。事前の打合せを重ねていたため、大きな混乱なく訓練を終了することができた。しかし、実際に水害が起きている状態でないため、参加した職員、生徒、保護者にとって実際に発生した場合に向けての訓練という意識が薄かった。

反省においても、想定外のルートから保護者が迎えに来ていることや、職員が引渡し時に相手を確認していなかったなど、原則についての理解度の差が話題になった。



### 3 学校防災アドバイザーの関わり（訓練実施前）

#### (1) 学校からの訓練について支援を受けたいと考えた内容

ア 避難訓練の反省をもとに、「訓練のための避難訓練」ではなく、実際に災害が起きたときに役立つ避難訓練にしたいと考えた。

イ 訓練参加者が、「実際の災害が起きたときにどうすればよいか、状況を判断しながら行動することが大切ではないか」と考え、そのような意識を持った訓練の在り方についてアドバイスを受けたいと考えた。

#### (2) 学校防災アドバイザーからのアドバイス

ア 訓練時において、災害のイメージが具体化されていないため、意識向上には限界があるのではないかと。例えば、地震を想定するのであれば大きな災害となった「阪神・淡路大震災」や「東日本大震災」の映像を見せることにより、揺れの大きさや緊迫感をイメージして訓練ができるのではないかと。

イ 現在の訓練では、マニュアル通りに行うことを前提としている。それでは、実際の災害には対応できないところもある。最低限の原則を共通意識として持ち、その場の状況に応じて避難する訓練を実施する必要があるのではないかと。

ウ 緊急防災無線システムを使用していない現在の状況では、災害が起きたときに学校も市も対応することが難しくなる。長期にわたり緊急防災無線システムを使用していないのであれば、訓練の中で使用してみることは価値があるのではないかと。

### 4 学校防災アドバイザーとの相談後の避難訓練について

#### (1) 地震に対する訓練

短時間ではあるが避難の方法を学ぶ場として行った。担当から、阪神・淡路大震災や東日本大震災について説明があり、写真や映像からその被害の大きさを生徒は学んだ。さらに、地震が起きたときの姿勢についても全校で確認し実際に机の下に潜ることを行っている。実際に映像を見ることにより、「自分の身は自分で守る」という意識をもって参加する生徒が多く見られた。



#### (2) 緊急防災無線システムの確認

安曇野市教育委員会でも実際に緊急防災無線システムを使用した経験のある職員が少ないことがわかり、本校の避難訓練時にシステムを使う訓練を行うようにした。打ち合わせの中で、11月よりスマートフォンを利用した無線システムに変更というタイミングも重なり、新システムの運用試験も兼ねて行うようにした。

実際に使用することにより、無線の状況や対応の仕方、無線システムへの理解など災害が起きたときの連絡手段を想定して訓練を行うことができた。

### (3) 原則を決めて、臨機応変に対応する避難訓練の実施について

これまでの避難訓練は、想定をはっきりさせ、放送機器が使えるのが当たり前だった。しかし、実際に災害が起きたときには、想定はなく、その場の状況を見て判断することになる。また、災害の規模によっては放送機器が使えない状況も考えられる。そのため、今回の避難訓練は、「放送機器が使えない」「避難できない生徒がいる」「休み時間に地震が起きて、職員も生徒も個々の活動をしている」という想定だけを定め、それ以外は状況判断しながら避難する内容とした。

はっきりとした想定がないため、多くの職員は、避難前から実際に災害が起きたときの状況をイメージしていた。実際に訓練が始まると、避難できない生徒を見つけると大きな声を出して助けを呼んだり、大きな声で誘導したりと、災害が起きたかのように訓練することができた。

また、生徒にとってもどのように身を守るのかを考えたり、教職員の指示をしっかりと聞いたりする機会となった。生徒は、今までの避難訓練の成果もあり、想定外のことがあっても落ち着いて避難することができた。



## 5 学校防災アドバイザーからの指導

- (1) 想定できない状況であったが、全般的には災害をイメージしてよくできていた。
- (2) 各場所の確認だが、例えばトイレの確認は「中まで入って確認する職員」と「入り口で確認する職員」がいた。何のために見回っているのかを意識したい。今回はいなかったが、災害で気を失っている要救助者がいる場合もあるので、扉を開けて確認することを今後共有していきたい。
- (3) 地震の避難において、生徒がかがんだ場所などについての振り返りを十分したい。頭部を守ってはいるが、後ろにガラスがあった。ガラスが割れたときには、体にガラスがあたることもある。自分の避難の仕方はどうであったのかを振り返り、今後活かしてほしい。

## 6 事業の成果及び今後の課題

- (1) 実際に災害があった時にどのように避難誘導するのか、また自分が避難するのかを日常の中ではなかなか想定することができない。アドバイスをいただきながら、避難訓練を行うことで現実に起きてしまったときにどのような判断をして行動していく必要があるのかを考えることにつながった。
- (2) 職員間で災害時の行動のイメージを日常から共有しておく必要がある。また、連絡ができないときもあるため、連絡を最小限にしての訓練を行う必要も感じた。

(文責 教諭 波場 雄司)

学校安全総合支援事業の取組について

－教員が不在時に、生徒が自ら判断し速やかに避難する訓練の実施について－

安曇野市立明科中学校

1 はじめに

本校は、安曇野市の北東に位置し、全校生徒約 160 名の中学校である。明科中学校では、緊急地震速報受信システムを設置したことを契機に「学校安全総合支援事業」に加わり、防災管理や防災教育を充実させてきた経緯があるが、その後、本事業に参加しない期間があった。そこで本校では、今年度から「学校安全総合支援事業」に再度参加し、学校防災アドバイザーとして信州大学教育学部教授 廣内大助先生を講師としてお迎えし、御助言をいただきながら避難訓練を実施する取組を行った。

2 明科中学校における最近 2 年間の避難訓練の実施状況

	4月	5月	9月	11月
R 6	避難訓練 (火災) 1 h 学活時 (告知あり) 出火場所：調理室 各クラスからの避難経路の確認	小中合同引渡し訓練 (地震) 1 h	避難訓練 (地震・火災) 1 h 教科の授業中 (告知なし) 教科担任による避難誘導 消防署員からの指導 消火訓練	避難訓練 (土砂災害) 1 h 学活時 (告知あり) 垂直避難の実施 土砂災害発生時に考えられる状況の確認
R 7	避難訓練 (火災) 1 h 学活時 (告知あり) 出火場所：調理室 各クラスからの避難経路の確認	小中合同引渡し訓練 (大雨) 1 h	避難訓練 (地震・火災) 1 h 教科の授業中 (告知なし) 教科担任による避難誘導 消防署員からの指導 消火訓練	避難訓練 (地震) 1 h 昼休みに実施 (告知なし)

5月実施の引渡し訓練については、明科地区の小学校2校と想定を揃えて計画立案し、訓練を実施している。それ以外の3回については、本校内における避難訓練を行っている。今後、「防災訓練3年計画」を策定していきたい。

### 3 昼休み（教員不在時）における避難訓練の実際 令和7年11月6日（木）実施

#### (1) 災害の想定と目的

大規模地震を想定し、昼休みのため生徒がさまざまな場所でそれぞれの過ごし方をしている状況において、地震発生時に身体の安全確保や状況判断を行い、ガラスなどの飛散により基本となる避難経路が使用できない場合に、自分たちで判断して臨機応変に変更し、速やかに避難することを目的とした。

#### (2) 訓練の経過

段階	時間	行動	説明
事前指導	朝の学活や授業	○特別教室からの避難について、各教室に決まりがあることを指導	・理科室、音楽室、美術室、技術室にある掲示物を確認。
地震発生	13:30	○地震速報受信装置で地震速報を流す（教頭）	
待機指示	13:31	○「現在、地震が発生しています。全校生徒は、物が倒れてこない・落ちてこない・動かない場所に退避し、次の指示を待て。」	・教室などにいる職員は、その場で周りの生徒を落ち着かせ安全を確保して放送を聞くように指示を出す。可能な限り、近くの扉をあける。
状況把握	13:33	○職員室にいる職員は、教頭の指示で校内を巡視して被害状況を確認し、教頭に報告	
避難指示	13:35	○「大規模地震発生。今後、余震の発生も予想される状況です。安全な経路で校庭に避難しなさい。」	
避難開始	13:36	○頭部保護（教室にいる生徒は白帽を着用） ○校舎内は早足（走らない）、校舎外は駆け足 ○階段注意（上の階を優先する）	・生徒とともにいる職員は、自分の周りの生徒の安全を確保しながら避難場所に誘導する。
人員点呼	13:41	○学級担任は人員確認をし、教頭へ報告 「報告します。○年○組、総員○名、欠席○名、現在○名、全員避難完了しました。報告終わり。」 ○学年主任は学年職員を確認し、教頭へ報告 「報告します。○学年職員、総員○名、現在○名、全員避難完了しました。報告終わり。」	・生徒は人員報告後、座って待機。

避難完了 まとめの会	13:50	○全校生徒の避難完了を確認し、避難訓練終了の指示 ○まとめの会で、生徒の感想発表	
避難訓練振り返り	14:05	○教室にもどり、振り返りフォームの記入	

### (3) 考察

事前告知なく実施した今回の避難訓練であったが、昼休みという状況でも、生徒は落ち着いて行動できている様子だった。放送時には、笑顔を見せることなく真剣に取り組んでいた。また、地震発生後の待機時に、周りの物が仮に落ちてきたり倒れてきたりしたとしても安全である場所を考えて行動している生徒の姿もあった。北校舎2F廊下のガラスが割れて飛散し、避難経路として使えない状況を想定したが、基本とは違う経路で速やかに校庭へ避難することができていた。結果として全校生徒が落ち着いて避難を完了することができた。しかし、実際の災害では、必ずしも全員が無事に避難できるわけではないので、行方不明者が出た場合を想定した訓練を実施していく必要があると思われる。また、生徒の逃げ遅れをなくすための方法を職員間で共有し、実行できるように体制を整えていきたい。



## 4 学校防災アドバイザーの関わり

### (1) 廣内大助先生の訓練事前指導 令和7年9月10日(水)

- ・実際に災害が起こったときにどんなことが起こるのか？できる限りの想定をしておく →そうすることで、いざというときに3～4割程度適した行動ができる。
- ・理科の実験中や調理実習中に災害が起こったらどのように行動するのか？教室への掲示や事前に確認しておく。
- ・教室の安全地帯をつくる(理科室の実験器具は教室の後ろ半分に保管する、など)。
- ・放送機器が使えなかったり、行方不明者がいたりする状況を想定した訓練の実施。
- ・逃げ遅れの生徒をゼロにするためにどうするか？職員の追い出し・点検方法。
- ・点検は、「ドアをあける」「声をかける」「目視する(特に死角を見る)」を徹底する。
- ・見回りや巡視のルールはあまりきつく決めすぎず、ゆるく決めておくほうがよい。
- ・引渡し訓練では、保護者の車の誘導を減らして、校務にあたる人手を増やすことがポイント。保護者は、矢印の表示で動くようにシンプルに伝えておく。
- ・引渡し帰宅後の生活場所について、分かる範囲で確認しておく(学校再開に向けた

準備の際に必要なことがある)。

- ・すぐにお迎えに来ることができるか、事前にアンケートをとっておく(どれくらいお迎えに来れないのか、把握しておく)。
- ・職員の訓練も大切。イレギュラーに対応する。想定外を考える。

(2) 廣内大助先生の訓練事後指導 令和7年11月6日(木)

- ・安全確保の基本は、「倒れてこない・落ちてこない・動かない」。
- ・生徒を残さず避難させる方法を考える(声かけ・目視→死角を確認)。
- ・職員の逃げ遅れを出さないことも重要。
- ・校舎は崩れる可能性は低いが、天井は落ちてくる危険性がある。
- ・防火扉の通り方を生徒に指導しておく。
- ・マニュアルは、すぐに見られるようにしておく。
- ・防寒が必要な時期に災害が起こった場合に、生徒はどうするか?  
→例えば、防寒着をすぐにとれる場所に置いておくようにするなどの日頃からの準備で、半分は対応が可能になる。

5 事業の成果及び今後の課題

はじめに述べたように、本年度から学校安全総合支援事業に再参加をし、廣内先生にアドバイスをいただきながら、今回の避難訓練を行った。生徒の取組は全体的に良好で、告知なしの訓練に対しても落ち着いて行動し、状況を判断しながら行動することができていた。今後は、「防災訓練3年計画」を策定し、さまざまな状況を想定した訓練を3年間のサイクルで実施する体制を整えていきたい。また、「生徒の訓練」だけではなく、職員の防災意識を高め、災害に対する対応力を学校全体として向上させていきたい。

(文責 教諭 宮坂 剛士)

学校安全総合支援事業の取組について

―地域と連携した防災教育について―

池田町立高瀬中学校

1 はじめに

池田町立高瀬中学校は、長野県北安曇郡池田町の北側に位置する学校である。地理的には、北西に雄大な北アルプスの山々を、西には清らかな高瀬川を望み、東には東山山系と呼ばれる山並みが連なる、自然豊かな環境に恵まれている。

全校生徒数が195人、各学年2クラスの構成となっており、目指す生徒像として「自ら拓き 共に生きる」を掲げている。また、生徒一人一人に寄り添った指導体制を強化するため、学年担任制を導入して今年で3年目を迎えた。さらに、池田町が定める第2次教育大綱「保小中15年プラン」を推進し、認定こども園、小学校、中学校が一貫して、子どもの能力や意欲に応じた個別最適な学びと、他者と協働して課題に取り組む協働的な学びに力を入れている。

2 池田町立高瀬中学校の防災教育（安全教育）について

(1) 活動のねらい

非常時における職員・生徒の安全防災行動の明確化を図る

(2) 活動内容

ア 防災・不審者対応計画の作成（緊急時対応マニュアルを全職員に配付）

イ 学校防護団組織の運営

ウ 消火器の整備

エ 避難経路の確認と作成

オ 避難訓練の計画と実施

4月 基本経路確認 5月 池田町4校合同引渡し訓練

8月 地震を想定した避難訓練 11月 火事を想定した無告知避難訓練

カ 防災教育の実施 8月 地域と連携した避難訓練

※防災アドバイザーのアドバイスにより11月実施に変更

キ 冷暖房器具使用の心得の作成（6月・11月）

(3) 安全点検

毎月安全の日（1日）を設定し、教室管理責任者が安全点検カードを使用し点検を行う。危険箇所、破損箇所がある場合は、営繕係に連絡し、対応する。

### 3 地域と連携した防災教育を行うために

地域と協力した防災教育および連携訓練の推進を目的に、以下の活動を実施した。

- (1) 池田町自主防災会連絡協議会に校長が出席し、本校の防災教育の指針を説明するとともに、各地区の自主防災会長へ避難訓練等の参観を依頼した。
- (2) 各地区の自主防災会長に「池田町4校園合同引渡し訓練」を公開し＜以下の写真＞、参観後の意見や感想を収集することで、地域視点での評価を仰いだ。



### 4 学校防災アドバイザーより

#### (1) 年度当初の計画

学年別分散型訓練を2時間扱いで次のように行う提案。

第1学年：通報・連絡（安否確認）訓練、煙道体験

第2学年：避難所設置訓練、段ボールベッド組み立て、簡易トイレ作製

第3学年：炊き出し訓練

#### (2) アドバイザーによる主な指摘・指導内容

##### ア 地域の特性把握

池田町の地形的特性から、水害時における迅速な避難行動の徹底が最優先課題である。

##### イ 防災管理

学校組織として、実効性のある具体的なマニュアルを整備すること。

防災学習は生徒一人一人が「自分の命は自分で守る」ための判断力を養うこと。

##### ウ 避難所開設に対する認識の再定義

避難所は地域住民が主体となって開設・運営するものである。

#### (3) 指導内容を踏まえた再計画（実践的学習への転換）

##### ア 全校共通学習

ハザードマップの基礎的な読解力を養い、地域の浸水リスクや土砂災害リスクを正しく理解する。

##### イ 地域特性に応じたフィールドワーク

居住地域の特性（水害リスクが高い地域、または土砂災害リスクが高い地域）ごとにグループを編成し、実際に現地を歩きながらハザードマップと照合する。実地確認を通じて、危険箇所の把握や具体的な避難方法の検証を行う。

## 5 事業の成果と今後の課題

### (1) 実際の授業の様子 <以下の写真>



### (2) 組織的な防災管理体制の確立と共通理解の深化

年度当初に、全職員に「緊急時対応マニュアル」を配付し、学校防護団組織を適切に運営することで、非常時における職員・生徒の安全確保行動を明確化することができた。

また、毎月1日の「安全の日」における点検活動をルーティン化したことで、校内の危険箇所に対する早期発見・早期対応のサイクルが定着した。これにより、ハード・ソフトの両面から学校の安全基盤を強固にすることができた。

### (3) アドバイザーの助言による「自分ごと化」への転換

当初計画していた「体験型訓練（炊き出し等）」に対し、専門家からの「池田町は早期避難が必要な地域である（特に水害）」「防災学習の目的は自らの身を守ることである」という指導を受けたことは、本事業の大きな転換点となった。これにより、単なる行事としての訓練から、地域の地理的特性（ハザードマップ）に基づいた「思考型・行動型の学び」へと再構築された。実際に現場を歩き、ハザードマップと照らし合わせながら危険箇所を確認するフィールドワークを実施したことで、生徒一人一人が「自ら拓き共に生きる」という教育目標の通り、主体的に判断し行動するための基礎力を養うことができた。

### (4) 総括

本事業は、従来の定型的な訓練を見直し、池田町の自然環境やリスクに即した「個別最適な学び」と、地域住民と連携した「協働的な学び」を具現化する第一歩となった。「防災管理」と「防災教育」を明確に区別し、生徒が地域の危険箇所を正しく理解したことは、将来の地域防災の担い手を育成する観点からも極めて意義深い成果であると言える。

また、学校安全教育実践委員会において「町全体で小中学校が系統的に防災学習に取り組む仕組みを構築すべきである」との意見が出された。これを受け、町内各校の取組の連続性を明確にするため、小中学校における防災教育の一覧表（資料1）を作成した。

(資料1) 令和7年度 池田町 小・中学校 防災教育実施記録

避難訓練	池田小		会染小		高瀬中	
	内容	外部指導者	内容	外部指導者	内容	外部指導者
第1回	授業中の火災		授業中の火災		授業中の火災	
第2回	授業中の地震		授業中の地震 防火扉体験		地震	
第3回	授業時間外 予告なし 火災		休み時間 予告なし 地震・火災 救出訓練		予告なし 火災 消火器訓練	南部消防署
一斉引き渡し訓練	高瀬川氾濫水害引き渡し訓練		高瀬川氾濫水害引き渡し訓練		高瀬川氾濫水害引き渡し訓練	※自主防災会 会長参観

学年別指導内容	池田小		会染小		高瀬中	
	内容	外部指導者	内容	外部指導者	内容	外部指導者
1年	もしも火災が起きたら もしも地震が起きたら ～どのように避難すれば良いの かな～		もしも地震が起きたら ～教室や校内の危険個所を見 つけよう～			
2年	もしも火災が起きたら もしも地震が起きたら ～どのように避難すれば良いの かな～		もしも地震が起きたら ～教室や校内の危険個所を見 つけよう～		段ボールベッド・防災テント	日本防災支会 長野支部
3年	もしも火災が起きたら もしも地震が起きたら ～どのように避難すれば良いの かな～		もしも地震が起きたら ～教室や校内の危険個所を見 つけよう～			
4年	もしも火災が起きたら もしも地震が起きたら ～どのように避難すれば良いの かな～ 高瀬川を知ろう		ハザードマップ作り ～地域の危険個所を見つけよ う～（保護者と一緒に）			
5年	もしも火災が起きたら もしも地震が起きたら ～どのように避難すれば良いの かな～ 土砂災害学習	県防災ボラ ンティア	土砂災害学習・段ボールベ ット・エアベット・災害用ト イレ	北陽建設 池田町防災土 イ		
6年	もしも火災が起きたら もしも地震が起きたら ～どのように避難すれば良いの かな～		自分にできることは～被災地 のことを知ろう～段ボール ベット・災害用トイレ	日本防災支会 長野支部		
全校 (公開授業・参観日)	消防団による防災参観 ・放水疑似体験 ・救急救命法心臓マッサージ体験 ・簡易段ボールベッドと防災カー テン体験	町消防団	上記の内容で全学年公開授業 を実施		公開授業参観 ハザードマップの見方と地区 の危険個所について	砂防ボラ ンティア協会 自主防災会長 参観

(文責 教頭 倉科 高志)